

モテットBWV226の歌詞についての一考察(3)

モテット2番の第3曲はマルティン・ルター(Martin Luther 1483-1546)が作曲したコラール(Choral)から採られている。コラールとは広義にはグレゴリオ聖歌を含む教会歌を指すが、狭義にはルターによりドイツ・プロテスタント教会で歌われた讚美歌を指す。宗教改革者で聖書のドイツ語訳者であるルターは同時に有能な音楽家であり、母国語(ドイツ語)による歌詞と単純で歌いやすい旋律を好み、また大衆が好んだ世俗歌曲の旋律を使って沢山の讚美歌に仕立てている。この第3曲はルターのコラール”Komm, heiliger Geist, Herre Gott(来てください/聖霊/主なる神よ1524)”の第3節であり、旋律は1270年頃からのものを使用している。ルターは古来のラテン語聖歌”Veni Sancte Spiritus(来たれ聖霊)”の改作をこのコラールの第1節として用い、第2節、第3節は独自に作詞した。下記に原曲のファクシミリと歌詞(古いドイツ文字)の概訳を示す。

♩ Der gefang Veni sancte spiritus.

Kom heyliger geyst herre Gott erfül mi
deyner gnaden gutt deyner gleubgē herg mu
vnd syñ/ deyn brunstlig lieb entzund yn yhn
h herr durch deynes liechtes glast/ zu de glaubē
versamlet hast/ das volck auß aller welt
sungen ds sey dyz her zu lob gesungē Alleluia.

Allc luia.
Du heiliges liecht edler hort/ las vns leuchtē des lebens wort. Vnd lern vns Gott recht erkennen/ vonn herzen vatter yhn nennen. h herr behut vor fremder leer/ das wir nicht meister suchen meer, Denn ihesum mit rechten glawben/ vnd yhm aus ganzer macht vertrauen. Alleluia Alleluia.
Du heilige brunst/ suser trost/ nu hylff vns frölich vnd getrost. In deyn dienst bestendig bleyben/ die trubfall vnns nicht abtreiben. h herr durch dein krafft vns bereyt/ vnd sterck des fleisches blodig keyt. Das wir hie ritterlich ringen/ durch tod vnd leben zu dir dzynen. Alleluia Alleluia

讚美歌「ヴェニ・サンクテ・スピリトゥス(来たれ聖霊)」

(第1節) 来てください/聖霊/主なる神よ/貴方の恵みの賜物で貴方を信ずる者の心と気持と感覚を満たしてください/貴方の熱い愛をそれらの中に点火してください/おお主よ/貴方はその御光の輝きで全世界の異なる舌を持つ民を信仰のもとに集められた/それだからこそ貴方に讚歌が捧げられる/アレルヤ/アレルヤ

(第2節) 貴方/聖なる光/貴重な宝よ/生命の言葉で私達を照らしてください/私達に神を正しく認めさせてください/心から彼を父と呼ばせてください/おお主よ/異なる教えから守ってください/私達が正しい信仰のもとにイエス以外の人を師として求めないように/彼を全力で信じるように/アレルヤ/アレルヤ

(第3節) 貴方/聖なる情炎/甘い慰めよ/さあ私達を助けてください/喜ばしげに安心して常に貴方にお仕えできるように/憂いが私達を追いやらないように/おお主よ/貴方の力により私達に準備を与え/肉体の衰えを鍛え直してください/私達がここで騎士のように戦い/死と生を通して貴方の御許に迫れるように/アレルヤ/アレルヤ

(この3節によるコラールは日本でも「讚美歌21」341番として教会で歌われているが、歌詞はかなり意識されている)

さて第3曲の歌詞の冒頭に出てくる Brunst は Geist「霊」を言い換えたものだが、辞書を引けば「(哺乳動物の)発情(さかり)」というとんでもない意味を持つ。古語としては「情熱」という訳語もあてられているが、さすがにこのコラールに相当するドイツ語の讚美歌125ではBrunstはGlut(灼熱)という言葉に置き換えられている。そもそもBrunstの語源はbrennen(燃える)にあるようだが、日本の「霊」が幽霊に見られるようになにか寒々とした青い光を想起させるのに対し、向こうのGeistは赤々とめらめらと燃え盛る情熱を示すようである。それがまた「甘い慰め」となる親しい存在でもあり、はてはまた第1曲にあるように「言葉にならないうめきをもって(我々と神・イエスとの間を)執り成してくださる(新共同訳)」のである。いずれにせよ彼我の「霊」に対する感覚・理解の相違をまざまざと感じさせる。

後半の歌詞で気になる言葉は Blödigkeit で、通常は「精神薄弱」などの意味だが、ここでは肉体の「衰え」を鍛え直すという意味で使用されているようである。ちなみにこの言葉は第1曲に出てくるSchwachheit「弱さ」に対応するが、形容詞を名詞化するための語尾はここでは口調上 -heitではなく -keit が使用されている。また ritterlich「騎士のように」もこの種のコラールでは珍しい使用例であろう。西欧の中世時代に甲冑に身を固め騎乗して主君に忠誠を誓って戦う騎士の姿はルター当時の庶民にも人気の的であったのであろう。この地上にあって騎士のように雄々しく戦って神に仕えるという趣旨であり、それを助けるのが聖霊ということであろう。

話しを聖霊に戻すが、西洋美術上聖霊は鳩がシンボルとして用いられている。下のエル・グレコの絵(1600年頃)は有名な新約聖書の使徒言行録の聖霊降臨の場を描いている。



【使徒言行録第2章第1-4節】五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上に留まった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。(新共同訳)

【後記】今までこの紙上を借りて筆者がモテット2番の歌詞、特に霊について考えたことの一部を披露しましたが、まだまだ宗教上・文化上理解できないことが多く勉強すべきことが多々あるようです。またルターのコラールはドイツ語の文法・解釈上疑問点が多く訳すのに苦労し、適訳かどうかの自信はありません。とりあえず今回で考察は終わりにしますが、モテットを歌うときのイメージ作りに役立てれば幸いです。(T 山田)